令和７年度　日本大学スポーツ科学部　個人研究費　研究実績報告書

所属： スポーツ科学部　競技スポーツ学科
資格： 准教授
氏名： 久保　賢志

研究課題名	スポーツ組織の組織変革におけるプロセスに関する研究
研究目的及び研究概要	本研究は、スポーツイベント組織における組織変革のプロセスを明らかにすることを目的とする。対象としたのは、市民参加型大会である大阪マラソンと伝統的なエリート大会であるびわ湖毎日マラソンの統合事例である。本研究は、スポーツイベント運営の実務経験から生じた問題意識を起点とし、統合がどのような意図と構造のもとで進められたのかを検討した。 具体的には、統合発表（2020年）から2024年大会までの期間における読売新聞および毎日新聞の記事を収集し、テキストマイニングによる計量分析を行った。その結果、報道には①統合の認知向上、②大会の魅力・規模の拡大、③記録志向の強調、④五輪代表選考等による競技レベル向上といったフレームが確認された。これらは、市民マラソンとエリート競技の融合を通じて大会の国際化と競技性を高めようとするスポーツ組織の変革志向を示すものであり、スポーツイベント組織が環境変化に対応し構造転換を図る過程の一端を示している。
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	【研究の進捗状況】 本研究の進捗は概ね順調である。本研究では、都市型市民マラソンである大阪マラソンと、伝統的なエリートマラソン大会であるびわ湖毎日マラソンの統合を事例として、スポーツイベント組織の変革がどのような意図のもとで社会に発信されたのかを検討した。具体的には、統合発表（2020年）から2024年大会までの期間を対象として、読売新聞および毎日新聞の記事を収集し、テキストマイニングを用いた計量分析を行った。これにより、スポーツイベントの統合をめぐる報道の特徴を整理し、組織の意図と社会的な語られ方との関係を検討した。本研究は、スポーツイベントの組織変革に関する研究として学会発表をしたうえで論文化し、研究成果として公表した。 【得られた成果】 本研究の分析の結果、両紙の報道には共通する傾向が確認された。具体的には、①統合に対する認知を高める報道、②市民ランナーとエリートランナーの融合による大会の魅力拡大、③記録への志向の強調、④五輪代表選考などを通じた競技レベル向上といったフレームが確認された。 また、報道内容は統合時に大阪マラソン組織委員会が示した方針と概ね一致しており、統合が大会の国際化や競技性の向上を目的として発信されていたことが明らかとなった。一方で、読売新聞と毎日新聞の表現には差が見られ、統合する側とされる側という立場の違いが報道の語り方にも反映されている可能性が示唆された。これらの結果から、市民参加型マラソンの拡大とエリートマラソンの統合という近年のスポーツイベントの構造変化が、メディア報道を通じてどのように位置づけられていたのかを明らかにすることができた。 【今後の課題】 本研究では、新聞報道を対象とした分析から統合の意図や語られ方を検討した。しかし、報道内容は大会組織や関係機関の意図を反映している可能性がある一方で、メディア特有の編集方針や立場の影響も受けていると考えられる。今後は、大阪マラソンおよびびわ湖毎日マラソンの関係者への聞き取り調査などを通じて、組織内部の意思決定過程や統合の背景をより詳細に検証する必要がある。また、都市型市民マラソンとエリートマラソンの融合がスポーツイベントの構造にどのような変化をもたらしているのかについて、継続的な研究を進めることが課題である。 【研究実績】 ・久保賢志，津吉哲士，三角さやか，杉本厚夫（2026）新聞報道から見る大阪マラソンとびわ湖毎日マラソンの統合．スポーツ科学研究，10，pp7-13. ・杉本厚夫，久保賢志，津吉哲士，尾島祥，三角さやか，山北隆太郎，談韡（2025）今、問う、大阪マラソンの Well-Being －こころ豊かな市民マラソンを目指して－ 大阪マラソン2025（第13回大阪マラソン）共同研究報告書，読売新聞社，関西大学.